

言葉としての土偶



①顔面取手(土器)



土偶②(縄文中期5000年前頃)



土偶③(縄文中期5000年前頃)

右の写真は、「こらあー」だろうね。口の形、つり上った眼。眉間にシワらしき筋。縄文女性の特徴であるぶ厚いヘアースタイルに大きな櫛。両すみに丸い大きな穴。たぶん耳飾り。イヤリング、最初は小さい穴からだんだん大きな耳飾りをハメこんでいくので、この女性、集落でも年長者。いろいろしきっていった、うるさい鬼バアーさんだったのでは？

若い者がそれを面白がって土をこねて造った。しかも親しみを込めて。造られたうるさい婆さんも笑って許しているように見える。

土偶②は、「いいー」って言っているようだ。

土偶③は、「あつ」って驚いている口の形。歴史に興味をもつてから、不思議で、どうしても知りたいと思うのは「言葉」で、特に文字を持たない時代、この縄文時代のころは、皆どんな言葉で話していたのか興味津々。

猿人らしき者からスタートした人類が、泣き叫ぶような声から、いつ言葉らしきものに変わっていったのか？

三枚の写真は、この十月に研修旅行で訪れた新潟県立歴史博物館に特別展示されていた土偶。実用品が目立つ土器、土偶の中にあつて実用品とはかけ離れた「ものづくり」を感じる。造って遊ぶ。喜怒哀楽の顔の表情を造って、思いを強くするためか形に残す。

文字を持たなかった社会の文字の代わりの土偶に見え、開いた口の形で言葉が読めそう。

昨年十二月に説明会のあつた八橋滝瀬遺跡出土品の年代測定や、発見された竪穴住居跡から定住の始まりの頃、約九千年前頃と推定されています。かねてよりウワサの境川沿い遺跡群。どんな言葉を使

い、どんなコミュニケーションを取っていたのか、言葉や暮らしだけでなく、この頃の風景も知りたいこと。どんな樹々、植物が生えていたのかなど、想いは遥か一万年前へ及びます。

直接会ってしゃべればいいのだが、それは夢の世界。

令和三年春にオープン予定の奥三河郷土館、そこで展示品との対話を楽しみに待ちましよう。

【①顔面取手(土器)】

東京国立博物館所蔵

【土偶②、③】

山梨県釈迦堂遺跡博物館所蔵
※写真掲載の許可を得ております。

(設楽町文化財保護審議会委員

金田 俊博)

